

上越教育大学附属小学校におけるオーストラリア訪問交流の実践 ー ウェストミンスタースクールとの交流活動ー

南 雲 民 人*・周 東 和 好**・越 良 子***・青 木 弘 明****・
北 條 礼 子*****

(平成29年3月31日受付；平成29年4月14日受理)

要 旨

上越教育大学附属小学校では、オーストラリア・ウェストミンスタースクールとの間で、相互訪問による交流活動を行っている。本論は、本学附属小学校の海外学校との訪問交流活動について、その開始から今日に至る経緯と、2016年の実践について詳述し、2016年の成果と課題について考察した。併せて、参加した児童らの渡豪前後における変化について、国際理解の観点によるアンケート調査および日誌の記述分析を行った。

その結果、実際に訪問経験をしたことによって、“親しみ”、“関心”などのカテゴリーにおける変化が得られた。これは引率した小学校教員によっても認められた効果であった。

今後の課題として、実務の面では確実な交通手段の準備と確認が必要であること、児童の学びの面では事前準備における学習指導・支援だけでなく、事後まとめにおける学習指導・支援を充実させることが考えられた。

KEY WORDS

short exchange activity in abroad school 海外の学校への訪問交流 elementary school student 小学生
Australia オーストラリア education for international understanding 国際理解教育

1 はじめに

上越教育大学附属小学校（以下、附属小学校という）では、2005年から現在に至るまで、オーストラリア・アデレードに所在するWestminster School（以下、ウェストミンスター校という）と、相互が各々の学校を訪れる交流活動を行っている。小学生が海外の学校と交流活動を行うことに関する報告は少なく、極めて稀な活動と考えられる。そのため、この交流活動をより良いものにしていくためには、実践に対する省察を行い、問題点を改善して必要があるが、これまでは前例に倣うように担当教員が引き継いだ内容を実施し、必要に応じてその都度対応していた。

そこで本論では、附属小学校のウェストミンスター校との訪問交流活動について、その開始から今日に至る経緯と、2016年の実践¹⁾について詳述し、その成果と今後の課題を明らかにすることを目的とした。併せて、2016年の参加児童らを対象に国際理解に関するアンケート調査を渡豪前後に行うと共に、参加児童らが綴った日記の記述分析を行い、訪問交流活動による変化について国際理解の観点からも考察することとした。

2 これまでの経緯

2.1 附属小学校におけるオーストラリアとの交流が始まった経緯および目的

ウェストミンスター校の訪問団が初めて附属小学校を訪れたのは、2005年の10月である。筆者の一人（青木）が当時1年生の担任として校庭の原っぱで活動をしているときに、20人位の小学生や中学生らがやって来て、1年生に話しかけ、シールを洋服に貼ってくれたり、コアラの小さなぬいぐるみをプレゼントしてくれたりした。滞在は10分位であったが印象的であり、鮮明に覚えている。既に大学側ではウェストミンスター校との交流があったようであるが、この来校が、附属小学校とウェストミンスター校との交流のきっかけとなった。

2007年にウェストミンスター校が附属小学校を訪問した際、ウェストミンスター校の引率者の一人（当時の国際交流担当責任者）に本学の大学側からの担当教員であった筆者の一人（北條）から、附属小学校の児童らがウェストミンスター校を訪問することが可能か否かについて非公式の打診をして、訪問が可能であるとの即答を得た。これらの経緯をもって、2008年に附属小学校の訪問団が渡豪した。このようにして、附属小学校とウェストミンスター校との交流活動が始まった。

*上越市立大潟町小学校 **芸術・体育教育学系 ***学校教育学系 ****附属小学校 *****人文・社会教育学系

表1 上越教育大学附属小学校におけるウェストミンスター校との交流活動の経緯

年度	来日・渡豪	主な交流活動
2005	来日	ウェストミンスター校の訪問団が、4月26日～28日の間、上越を来訪し、本学との交流を行った。訪れたのは、中学・高校生の音楽演奏グループと引率教員の計39人であった。 一行は、4月26日に附属中学校を訪問し、音楽交流会を行った。交流会には附属中学校の全校生徒が参加し、訪問団のバンド演奏と合唱隊のコラス、附属中学校吹奏楽団の歓迎演奏と3年生全員による合唱、大学生による箏曲などが披露され、音楽による和やかな交歓が行われた。 ウェストミンスター校からは、同年10月にも小学生らの訪問団が上越を訪れ、交流した。
2007	来日	10月3日に、ウェストミンスター校初等部児童22人、引率者5人による一行が来日し、本学の附属小学校を訪問した。附属小学校では全校集会で一行を出迎え、1～6年生の12学級に分かれて英語と日本語を使った交流授業を行った。 訪問団一行は、附属小学校のほか、本学学生らの案内で上越市内の雁木通りや町屋を見学した。また、訪問団の宿泊先である「妙高青少年自然の家」に本学学生らが赴き、紙飛行機と月見だんご作りを行った。この際、附属小学校の児童らがウェストミンスター校を訪問することが可能であるとの内諾を得た。
2008	渡豪	8月24日～29日 附属小学校からの第1回渡豪訪問 児童20人（5年生10人、6年生10人）、引率6人
2009	—	ウェストミンスター校からの訪問中止 10月に来校予定であったが、国内外での新型インフルエンザ流行のため、この年の訪問が翌年に延期となる。このため、これまで隔年での訪問が、翌年からは同年度に相互の交流となる。
2010	渡豪 来日	8月21日～26日 附属小学校からの第2回渡豪訪問 児童21人（5年生10人、6年生11人）、引率7人 10月4日 ウェストミンスター校来校、交流授業
2012	渡豪 来日	8月22日～27日 附属小学校からの第3回渡豪訪問 児童20人（5年生10人、6年生10人）、引率7人 10月1日～3日 ウェストミンスター校来校、交流授業 初等部の生徒18人と引率者3人の計21人の訪問団が来訪した。附属小学校では、2日に歓迎音楽集会、米粉料理調理体験、オーストラリアの遊び紹介、給食、日本の遊び・文化体験などの活動を行った。
2014	渡豪 来日	8月2日～7日 附属小学校からの第4回渡豪訪問 児童20人（5年生10人、6年生10人）、引率7人 10月1日～4日 ウェストミンスター校来校、交流授業 初等部の児童生徒13人と引率者2人の計15人の訪問団が来訪した。附属小学校では、2日に交流活動を行った。
2016	渡豪	8月20日～25日 附属小学校からの第5回渡豪訪問 児童20人（5年生10人、6年生10人）、引率7人 これまでに訪問した際の協力に対して、本学学長からの感謝状を持参し、歓迎集会にて贈呈した。 10月ウェストミンスター校来校中止（参加希望児童数の不足と、国際情勢を懸念したことによる）

附属小学校におけるこの交流活動は、「異国の文化に触れ、外国人と交流することを通して、異文化（言語、生活様式等）への理解と関心を深める」ことを目的として、今日に至るまで実施されてきた。

2.2 2016年までの実施状況の概要

附属小学校とウェストミンスター校との交流活動の今年度までの実施状況は、表1の通りである。本学国際交流推進センターが随時発行する「国際交流のひろば」を参考にまとめたものである。この表に示された通り、両校の交流は2005年にウェストミンスター校が来校したことに始まり、その後2007年から双方が1年おきに渡豪、来日することとした。

しかし、2009年の来日が中止となり、翌年2010年に来日することとなった。附属小学校は2010年の渡豪を予定通り実施したため、同年度に時期を変えた相互の交流活動となった。以来、隔年での相互交流が続き、今回2016年8月に附属小学校が渡豪し、交流活動を行った。併せて、これまでに訪問した際の協力に対して、本学学長からの感謝状を持参し、歓迎集会にて贈呈した。同年のウェストミンスター校の来日は、参加希望児童が規定の催行人数に達しなかったことと、国際情勢を懸念したことから中止となった。

3 2016年の訪問交流

3.1 事前の準備

3.1.1 実施計画の提示・説明会

訪問日が8月20日から25日と決まったことから、前年度の2月に4、5年生の保護者向けの文書「オーストラリアウェストミンスター校訪問活動説明会及び参加者の抽選会について」を配布した。

訪問活動説明会は、3月8日に行った。訪問活動への参加を希望する4、5年生の親子が40組集まった。説明会では、訪問の目的や日程、費用、健康面における注意事項などを話した。とりわけ、日本から遠く離れた外国における、集団での長期に渡る活動であることから、次に示す事項に該当する場合は、参加希望を遠慮頂くことをお願いした。すなわち、①健康維持のために常時機材等を携帯する必要がある、②健康維持のために定期的に薬剤を投与する必要がある、③重篤な症状につながる食物アレルギー・動植物アレルギーがある、④就寝時、定時に起こす必要がある、という場合である。また、各学年10人の募集定員であることから、希望者多数となった場合は抽選で決定することを伝えた。

3.1.2 参加者の抽選・決定

訪問希望者が4、5年生とも募集定員を超えたため、3月15日に参加児童決定のための抽選会を行った。抽選会は、訪問活動参加希望者本人がくじを引くこととし、保護者は同席しなかった。厳正を期するため、学年PTA役員の下で行われた。4年生の希望者は21人（男児7人、女児14人）、5年生の希望者は13人（男児3人、女児10人）であった。抽選により、4年生10人（男児2人、女児8人）、5年生10人（男児2人、女児8人）が決定した。抽選の結果は、文書で各家庭に知らせた。

なお、附属小学校教員6人（校長、指導教諭、5、6年生各担任教諭、外国語活動担当教諭、養護教諭）と、本学国際交流推進センター委員の大学教員1人が引率した。

3.1.3 訪問参加児童・保護者説明会

6月7日にウェストミンスター校訪問参加児童及び保護者を対象にした説明会を開いた。3月の現地下見の報告や、旅行に関する諸手続きについての説明が主たる目的であった。そのため、旅行会社の担当者も同席した。旅行会社からは、オーストラリアの情報を始め、持ち物に関することや海外旅行保険の加入、ETAS（電子入国許可）の登録、旅行代金の支払いについて説明された。

3.1.4 事前学習

事前学習会は4回（7月1日、7月8日、7月15日、8月4日）行われた。7月1日は、英語で自己紹介ができるように準備した。名前のほかに、年齢や誕生日、好きな食べ物やスポーツ、教科などを言えるようにした。7月8日からは、ウェストミンスター校での交流活動の準備を行った。現地で1時間ほど当校の児童らが主となって行う交流活動である。児童らはどんな交流がよいかを考え、折り紙や将棋、習字など日本らしい遊びや活動の案を出した。話し合いを経て、折り紙、けん玉、福笑い、すごろく、鬼ごっこに決まった。児童らは、ウェストミンスター校の児童に、遊びのやり方やルールの説明を英語でできるように、活動グループごとに準備を進めた。合わせて、全校歓迎集会でのスピーチ練習も行った。

この事前学習における英語の準備については、引率する外国語教員が相談に乗りつつ、確定した。

3.1.5 直前の荷物確認

8月17日に荷物確認を行った。旅行会社の担当者と添乗員が立ち会った上での最終確認であった。海外への添乗経験が豊富な添乗員からの持ち物や服装などに関する説明は説得力があり、保護者は安心した様子であった。また、国際理解に関する事前アンケートを行った。

3.2 訪問交流の実施

3.2.1 交通事情

附属小学校と成田空港の往復は借り上げたバスによるものであり、参加者全員がスーツケースを持参していることから、とても助かった。

飛行機での往路は成田発-ブリスベン経由-アデレード着、復路はアデレード発-シドニー経由-成田着、という経路であった。乗り継ぐ場合には一般的に、預けた荷物を最終目的地の空港で受け取るが、オーストラリアでは警備上の規則により、乗り継ぎであってもオーストラリアの最初の空港で預けた荷物を受け取り、入国手続きを行ってから乗り継ぐこととなっている。旅行業者がブリスベンでの乗り継ぎとして関連付けられていない航空券を別々に入手していたため、次の二つの問題が生じた。一つ目は成田空港の搭乗手続きの際、先に手続きを行った8人について、最終目的地がアデレードではなくブリスベンとして処理され、スーツケースを受け取られてしまった。引率者の指摘から、添乗員がブリスベンでの乗り継ぎを申告していないことが分かり、預け入れして空港内で輸送されている8個のスーツケースを引き上げ、チェックインをやり直した。このため、1時間以上の時間を費やし、ほぼそのまま搭乗口へと移動した。そのため、成田空港内を見学する時間的余裕はなかった。無論、引率者らはこのように手配されている航空券であることをそれまで知らなかった。二つ目は、通常の発券では組み合わせることがない無理のある乗り継ぎとなってしまう、搭乗時刻を過ぎ、出発時刻での搭乗となった。先述した成田での手続きのし直しをしなかったら、乗り継ぎの際に改めて荷物預け入れの登録手続きが一人ひとりについて必要となり、この時刻に搭乗することができなかったことは明らかである。

アデレードに到着してからは、ウェストミンスター校のK教諭が自家用車で空港へ迎えにおいで下さり、ジャンボタクシーも手配されており、滞在中の移動のほとんどはこの2台によるものであった。アデレード3日目の校外活動は、ウェストミンスター校の学校バスによるものであり、4日目のシドニー市内の見学では、旅行会社が手配した大型バスによるものであった。

3.2.2 活動の様子

ここでは、渡豪中8月21日から24日までの4日間の活動の様子について、児童が携行した「オーストラリア・ウェストミンスター校 訪問活動のしおり」（以下、「訪問活動のしおり」という）に記述された日記の文章も参照しつつ、引率した教員の目線から詳述したい。

3.2.2.1 1日目 アデレード市内の見学

成田を出発して約9時間で経由地のブリスベンに着いた。その後飛行機を乗り継ぎ、約2時間で目的地であるアデレードに到着した。到着ロビーでは、ウェストミンスター校の日本語担当教師であるK教諭が出迎えてくれ、その後ホテルに向かった。ホテルはコンドミニウム型で、キッチンや洗濯機などの生活用具が備え付けられており、児童らは家にいるような気分になったようだった。児童らは4人グループで一部屋を使い、3日間の共同生活が始まった。なお、部屋での過ごし方について、過去の渡豪中におけるホテル内でのアクシデントに基づいて注意を促した。

児童らは異国の地に降り立った興奮からか、長旅の疲れを見せずたって元気であった。午後から予定通り、アデレード市内見学に出かけた。

まず、南オーストラリア博物館 South Australian Museumを訪れた。そこでは、恐竜などの化石や石器時代の道具を見たり、アボリジニの歴史や文化などを学んだりした。児童らは見るものすべてが新鮮なようで、自分のカメラに収める姿が見られた。

その後、歩行者天国のランドモールに赴いた。「歩行者天国のランドモールでお土産を買いました。オーストラリアドルで買わなければならなかったのですが、レジに並んでいる間もずっと緊張していたけれど、上手く通じたようで買うことができたので嬉しかった」（H児6年生）と、その日の日記に書かれたように、緊張しながらも自分や家族のお土産を選び、店員とコミュニケーションをとりながら購入する姿が見られた。

夕食は海辺近くのレストランでとった。英語で書かれたメニューから自分の食べたいものを選び注文した。「私が注文したのはミニハンバーガーで、野菜が飛び出ている外国らしさがあったといいなと思いました」（H児6年生）と日記に書かれたことから、日本との食文化の違いを意識しながら食していたことが窺える。

食事後はホテルに戻り、翌日のウェストミンスター校訪問に向け、予定の確認や歓迎式のあいさつ、学校紹介の練習、交流活動の最終確認などをして就寝した。

3.2.2.2 2日目 ウェストミンスター校訪問

この日は、本交流活動の中心的な活動であるウェストミンスター校を訪問した。児童はバディと組んで活動することになっており、本校児童らにとっては待ちに待ったバディと対面する日であった。

学校に到着し、K教諭の日本語教室に入室した。1時限は、今日の予定の確認や昼食の注文を行った。普段給食を食べている本校児童らにとっては、昼食の注文も新鮮な出来事であった。ウェストミンスター校児童と同様に、英語

表記のメニューから注文するものを決め、袋にお金を入れて提出した。

2時限は、5年生の日本語の授業に参加した。児童らは、緊張しながらも名前や年齢、好きなことを積極的に聞く姿が見られた。児童らは2限後に自分のバディと対面した。ドキドキワクワクしながらも緊張から当初は表情が堅かったが、オーストラリアの土地柄が、気さくで明るいバディのおかげで、話は通じなくとも次第に笑顔でコミュニケーションを図るようになり、一緒に運動場に飛び出し体を動かしたり、休み時間に中庭のベンチで一緒にお菓子を食べたりする姿が見られた。「バディと会って一緒にお菓子を食べました。いろいろなことを積極的に聞いてきてとまどいながらも会話をすることができました。休み時間にお菓子を食べるという、附属小や日本では絶対にできないことができることがうらやましかったです」(H児6年生)と、日記に書かれたように、ここでもまた児童らは日本の文化との違いに気付き、衝撃を受けた様子であった。

3時限は、バディと一緒に校内散策活動に出かけた。「学校がものすごく広くて、附属小が比べ物にならない。文化会館のようなホールもあった」(K児5年生)と、目を輝かせて報告する児童の姿が見られた。児童らの順応性は高く、バディと笑いながら戻ってくる姿からも、この校内散策活動は、バディとの距離を縮める役割があったと思われる。

4時限は、附属小学校の児童らの計画による交流活動であった。福笑い、すごろく、けん玉、折り紙の4つのブースで、日本の遊びを紹介した。「私たちの交流活動では、福笑いをしました。説明の練習をがんばって練習してきたので、間違えずに言うことができました。個性的な作品がたくさんできて、私も嬉しくなりました」(H児6年生)と、児童が日記に書いたように、自分たちの説明が相手に伝わり、楽しそうに取り組む姿を見て、自分たちも嬉しくなるという微笑ましい姿がそれぞれのブースで見られた。活動を通して一緒に笑い、一緒に楽しむ姿が見られ、バディを始め、ウェストミンスター校の友だちとのかかわりを深めた。最後に、交流活動で使ったすごろくやけん玉などの道具をプレゼントした児童らは、それらの道具で楽しく遊んでくれることを願った。

その後、ウェストミンスター校の中学生までの児童生徒が全員出席する歓迎集会が行われた。附属小学校の代表児童が上越市や附属小学校についてパワーポイントによって写真を交えて紹介し、その後、児童ら一人ひとりが自己紹介を行った。

大仕事を終えた児童らは、朝注文しておいた昼食を受け取り、バディと一緒に中庭やグラウンドなどで食べた。普段教室で一斉に給食を食べている児童らにとって、これもまた新鮮な出来事だったようだ。

午後の5、6時限は、バディのクラスで授業に参加した。当然であるが、英語で話す先生の指示や説明が理解できず、何をしてもよいか分からないという不安から泣き出してしまう児童もいたが、バディが近くで寄り添ってくれたため、多くの児童らは笑顔で戻ってきた。「体育でサッカーをした。日本と共通のルールだったから楽しくできた」(M児5年生)と日記には記述された。

放課後には、日本とオーストラリアのスポーツ交流を行った。児童らは、日本のドッジボールと氷鬼を紹介した。実際にやりながらルールを理解し、楽しむ姿が見られた。オーストラリアの児童らからは、オーストラリアラグビーやバスケットボールに似た「ネット・ボール」を紹介された。オーストラリアラグビーでは、楕円のボールに手こずりながらも、すぐにコツをつかむ児童の姿が見られた。スポーツは互いの仲を深めるきっかけとなり、自然にハイタッチする姿が見られた。

3.2.2.3 3日目 バディとの校外活動

3日目は、バディと共に校外に出かけた。まずは、昼食を購入するため、セントラルマーケット Central Market に向かった。「フルーツ屋さんやお菓子屋さん、お寿司屋さんまであって外国でもお寿司は有名なんだなと思いました。お昼をパン屋さんで買いました。パン屋さんにはカラフルなサンドウィッチが並んでいて、結構おしゃれでした。私はリリーにすすめられて、ソーセージのパンとツイストドーナツを買いました。リリーがお金を払うときに手伝ってくれてとても嬉しかったです」(H児6年生)と、日記に書かれたように、ここでも児童らは自分で買い物をした。困った時にはバディが助けてくれ、児童らにとってバディは心強い存在になっていた。また、思いがけずお寿司にも出会い、日本の食文化がオーストラリアでも受け入れられていることを実感した様子であった。その後、マウントロフトー Mount Lofty という山頂にある景色のよい場所に行き、アデレードの町並みを見下ろす絶景ポイントで昼食を摂った。

午後は、多くの児童らが楽しみにしていたクリーランド自然動物園 Cleland Wildlife Parkを訪れた。そこでは、コアラやカンガルーを始め、エミューやタスマニアアンデビルなど、オーストラリア特有の動物を見ることができた。「ずっと見たかったコアラは眠り中で、残念ながら起きていた時の顔を見ることはできませんでした。でも、コアラに負けず、カンガルーもそこら中を飛び跳ねていて、中にはまるでおじさんのような恰好をしたカンガルーもいまし

た。すぐくおもしろくてカメラにもしっかり取めておきました。ほかにもエミューやカラフルな鳥がたくさんいて、すぐく楽しかったです。最後はコアラとバディと一緒に写真を撮りました。コアラもカンガルーも見られてとてもオーストラリアらしい体験ができました」(H児6年生)と、日記に書かれたように、日本ではなかなか見ることができない動物に出会い、触ったり、餌をあげたりと、貴重な体験ができた。

最後に、ウェストミンスター校に戻り、思い出アルバム作りを行った。K教諭が指導するパソコン部の部員にも手伝ってもらい、自分が撮った写真や引率教員が撮った写真からお気に入りの写真を選び、アルバムを作成した。

バディと過ごす最後の夕食として、バイキングレストランでバディとその家族、ウェストミンスター校の担当教員と共にした。「バディと食べるとやはり食べ物もおいしく感じられるようです。リリーとホリーともっと一緒にいたかったけれど、お別れの時間は必ず来てしまいます。リリーはチョコレート、ホリーはボールペンやキーホルダーを私にプレゼントしてくれました。リリーとホリーはこれからもずっと忘れない最高で特別な友だちです」(H児6年生)と、日記に書かれたように、どの児童もバディとすっかり打ち解け、夕食の時間を楽しんだ。本校児童からはバディに扇子と手拭いが贈られた。お別れの時間が近付くと、一緒に肩を組んで写真撮影をしたり、抱き合ったり、中には、別れを惜しんで涙ぐむ児童の姿も見られた。「今度は日本に来てね」と、児童らは日本での再会を願った。

3.2.2.4 4日目 シドニー市内の見学

アデレードから約2時間のフライトでシドニーに到着した。シドニーは残念ながら雨であった。シドニー最初の見学先はシドニー水族館であった。水族館に向かう途中のレストランで昼食を摂った。「巨大なハンバーガーが出てきて、ポテトも付いていました。私がオーストラリアの料理を見て知ったことは、『空いているスペースができるとポテトを付ける』ということです。アデレードのレストランで夕食を食べた時もそうで、かなりおもしろい発見のような気がします」(H児6年生)と書かれたように、オーストラリアの食文化に対する児童らの興味、関心は尽きない。発見を楽しむ児童らの姿が見られた。昼食後に、シドニー水族館に入場した。「新潟の水族館の倍はあり、本当にいろいろな種類の魚がいました」(H児6年生)、「水族館で初めてジュゴンを見ました。とても大きかったです」(M児5年生)と日記に書かれたように、児童らは水族館の規模の大きさに驚くとともに、オーストラリアの珍しい魚を見て楽しんだ。

見学の最後は、世界遺産のオペラハウスであった。施設の日本人ガイドによる30分のガイドツアーにより、建設の様子や建物の特色が説明され、地元の高校生らがコンテストの練習をしているホール内も見学することができた。「柱が一本も使われていないことに驚いた。こんな建物の形の発想が浮かぶことはすごい」(K児5年生)、「オペラハウスは独特な形だけれど、それをつくるためにたくさんの努力があり、苦労したことが分かった」(M児5年生)と日記に書かれたように、オペラハウスの歴史や建物の構造などについて学ぶことができた。

3.3 事後の様子

夏休み明けの9月2日に参加児童らを集め、国際理解に関する訪問後アンケートを行った。また、振り返りの作文を書かせた。帰国後1週間であったため、「楽しかったな。また行きたいな」「バディに会いたいな」と、まだ旅の余韻に浸っているような児童らの声が聞かれた。中には、「バディからのメールが届いた」と嬉しそうに報告する児童らの姿も見られた。

3.4 引率教員からみた成果

参加児童らの多くは、抽選で当選した3月から、オーストラリアに行くことを楽しみにしていた。その反面、日本から遠く離れた異国の地で4日も過ごすことへの不安や、バディと仲良くできるのだろうかという不安を抱えていたことも事実である。以下に示すのは、今回の訪問を振り返って書いた児童らの作文(一部抜粋)である。

私が一番心に残ったのは、言葉が通じないところも多々あった中、バディとたくさん話ができたことです。バディとは今でもメールで交流をしていますが、もっと英語の勉強をして、いつかまた会ってたくさん話をしたいです。(H児6年生)

一番心に残ったのは、たくさんの人たちが明るく積極的に話しかけてきてくれたことです。私のバディもいつも話しかけてくれたので、緊張がほぐれて仲良くなれました。言葉があまり通じなくても話したいという気持ちがあれば

通じるのだと思いました。これからもっと英語を学び自分からコミュニケーションをとれるようになりたいです。
(N児6年生)

行く前は、言葉が違うのでバディと仲良くできるか心配でしたが、行ってみるとみんなが笑顔で出迎えてくれました。言葉が違って心はつながっているように思えました。オーストラリアに大切な友だちができたことは一生の宝物です。(N児5年生)

これらの作文の記述からは、児童らが不安を乗り越えてすすんでかかわろうとしていた様子が読み取れる。また、「英語を勉強して、いつかまた会ってたくさん話をしたい」、「これからもっと英語を学び自分からコミュニケーションをとれるようになりたい」、「言葉が違って心はつながっている」など、前向きな言葉でまとめていることから、訪問の経験が自信となり、今後の自分づくりにつなげようとしている様子が窺える。

訪問を通して、オーストラリアの言葉や文化、生活様式を学んだり、友好を深めたりすることに留まらず、自分のこれからについて展望をもったり、人の心の在り様に迫ったりする児童らの姿が見られたことは大きな成果である。このような貴重な体験ができた20人の児童は大変幸せである。しかし、このことを一部の児童だけの成果とするのではなく、報告会や外国語活動時での紹介等の活動を通じて、附属小学校5、6年生全体の財産としていかなければならないと思われる。

4 アンケート調査の結果と考察

本項では、児童らを対象に渡豪前後に実施した国際理解に関するアンケート調査の結果についてまとめ、ウェストミンスター校への訪問交流活動が、児童らの国際理解に変化をもたらしたのかについて考察する。

4.1 方法

4.1.1 調査対象者

訪問交流を行った児童、5年生10人(男子2人、女子8人)、6年生10人(男子2人、女子8人)、計20人であった。

4.1.2 手続き

教員の教示のもと、集合調査法により一斉に質問紙を配付・実施した。訪問前アンケートは8月17日に、訪問後アンケートは9月2日に実施した。

4.1.3 アンケートの構成

鈴木他(2000)を参考に作成した国際理解尺度を用いた。鈴木他(2000)の国際理解尺度は、概念的には4領域9因子から構成されている^{註2)}。中学・高校・大学生対象の調査における因子分析結果が示されているためそれを参照し、さらに小学生の回答しやすさを考慮して各因子から2項目ずつを選び、全18項目によって構成した(項目は表4を参照)。

各項目に対して、「はい」、「どちらとも言えない」、「いいえ」のいずれかを選択して回答することを求めた。また、訪問後調査では、各項目に対して「強くそう思った出来事」を自由記述することを求め、その他に「オーストラリアでの活動で一番思い出に残っていること」の記述も求めた。

個人属性として、性別、学年、海外旅行経験の有無、外国人の友人の有無、外国人の親戚の有無、これまでに習った外国人の教師の数、英会話教室経験の有無について尋ねた。

その他の資料として、訪問に際して児童が携行した「訪問活動のしおり」(A5判)に児童が記した日記を分析材料とした。

4.2 結果と考察

4.2.1 国際理解尺度における各回答の度数

国際理解尺度全18項目について、それぞれの「はい」、「どちらとも言えない」、「いいえ」を選択した人数を訪問前と訪問後別に検討した。多くの項目で「はい」と答えた人数が多いが、訪問前では項目6「外国の生活習慣をよく知っている」や項目10「他の国の文化をもっと理解したい」において、訪問後では項目6、項目8「外国の歴史につ

いての本を読みたい”，項目11“人間が捨てたものは土・水・空気を汚しているか知りたい”，項目16“英語などの外国語で話しかけられても理解できる”において，“いいえ”あるいは“どちらとも言えない”が多かった。訪問前後を通して，項目15“日常会話ならば英語などの外国語で話すことができる”では3つの回答肢の人数が同程度であった。

4.2.2 国際理解尺度に基づく国際理解度得点の算出

尺度の検討及び訪問前後の変化分析のしやすさのために，国際理解尺度の回答に基づき，国際理解度を得点化した。各項目に対して“はい”，“どちらとも言えない”，“いいえ”のいずれかを選択した回答を，国際理解度の高さを表す内容である各項目に対する肯定度と見做し，それぞれ3点，2点，1点に換算した。すなわち，得点が高いほど，国際理解度が高いことを示す。

4.2.3 尺度の検討

先述の通り，国際理解尺度の構成は，鈴木他（2000）において概念的検討では4領域9因子，中学・高校・大学生対象の調査に基づく分析結果からは4領域6因子とされている。しかしながら，本調査では対象者が20人のため，因子分析は実施できない。そこで，9因子を仮定して，各因子に含まれるそれぞれの2項目間の相関を算出した。その結果，相関値は，訪問前の項目15・16間で.68($p < .01$)，項目17・18間で.47($p < .05$)，訪問後の項目5・6間で.39($p < .10$)，項目17・18間で.41($p < .10$)であった。それ以外は無相関であった。このことから，小学生の国際理解は，中学生～大学生と同様の因子構造ではないことが示唆される。そこで，小学生の海外との訪問交流活動の成果に関する詳細なデータを蓄積する必要性も考慮して，以降では，項目ごとに分析を行った。

4.2.4 海外旅行等の個人的経験による違い

海外旅行経験の有無等の各属性の人数については表2の通りであった。これらの属性による国際理解度の違いを検討するため，個人ごとに国際理解度全項目の平均点を求めてこれを全項目平均得点とし，各属性の群ごとにその平均を算出した（表2）。海外旅行経験，外国人の友人，外国人の親戚，英会話教室経験のあり群・なし群間で国際理解度得点（全項目平均得点）に違いがあるか否かを検討するため，訪問前・後別に，それぞれt検定を行った。

その結果，海外旅行経験の有無による訪問後の得点に有意差がみられ ($t(18)=2.189, p < .05$)，海外旅行経験あり群の方がなし群よりも訪問後の国際理解度得点が高かった。それ以外に有意な結果は得られなかった。習ったことのある外国人の教師数については4カテゴリーに分け，それらの間で分散分析を行ったところ主効果が得られ ($F(3,16)=4.500, p < .05$)，訪問後において，外国人教師数2～4人の群よりも5人以上の群の方が，国際理解度得点が高かった。

なお，鈴木他（2000）に倣い，これらの属性について“あり”の回答を1点として，国際理解尺度全項目との相関も算出した（表3）。鈴木他と同様に，外国人との交流や海外旅行・英会話教室経験は国際理解度と相関が高かった。概ね，小学生においてもそれらがある方が国際理解度は高いことが示唆された。

4.2.5 訪問前後における国際理解度の変化

5泊6日，現地での活動は実質3日の訪問活動で，大きな量的変化があるとは期待できないが，訪問交流の効果を把握する一手段として訪問前後における国際理解度得点の変化を検討した。訪問前後における全児童及び学年別の国際理解度得点を表4に示した。なお，性差の検討は，対象児童の性別に偏りがあるため行わなかった。

4.2.5.1 全児童における訪問前後の変化の検討

全児童を対象として，各項目における訪問前・後の得点の違いをt検定によって検討した。その結果，殆どの項目で有意な違いは見られなかった。しかし，項目9“他の国の独自の習慣を尊重したい” ($t(19)=2.042, p < .10$)，項目11“人間が捨てたものは土・水・空気を汚しているか知りたい” ($t(19)=1.831, p < .10$)，項目14“貧しい国の子どもたちが教育を受けられるように応援したい” ($t(19)=2.179, p < .05$)において，訪問前後で得点が低下したことが示された。

4.2.5.2 学年別の訪問前後の変化の検討

学年（2：5年生・6年生）と時期（2：訪問前・後）を独立変数とした分散分析を実施した。その結果，殆どの項目で有意な違いは見られなかったが，項目5“他の国の料理をいくつか挙げるができる”において交互作用の

表2 個人的経験の各群における国際理解度得点

	群	人数(人)	国際理解度得点 (全項目平均得点)	
			訪問前	訪問後
海外旅行経験	あり	7	2.6(0.2)	2.6(0.3)
	なし	13	2.5(0.3)	2.4(0.1)
外国人の友人	いる	6	2.6(0.3)	2.6(0.3)
	いない	14	2.5(0.2)	2.4(0.2)
外国人の親戚	いる	1	2.4	2.6
	いない	19	2.5(0.3)	2.4(0.2)
英会話教室経験	あり	14	2.5(0.3)	2.5(0.2)
	なし	6	2.6(0.2)	2.4(0.2)
これまで習った外国人の教師数	0人	2	2.6(0.1)	2.3(0)
	1人	4	2.6(0.3)	2.5(0.1)
	2～4人	9	2.4(0.2)	2.3(0.1)
	5～8人	5	2.7(0.2)	2.7(0.3)

括弧内はSD

表3 個人的経験と国際理解度との相関

項目	海外旅行 経験の有無		友人の有無		親戚の有無		英会話教室 経験の有無		外国人教師 数(人数)	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
全項目平均 得点	.46*									
項目1										
2										
3										
4	.43+									
5										
6	.44+	.53*								
7										
8	.43+									
9										
10										
11	.49*									
12	-.44+									
13	.49*									
14										
15	.54*	.48*								
16	.45*									
17	.45*									
18	-.43+									

有意な相関値のみを示した。

相関値が高いほど、各経験等のある方が国際理解度が高いことを示す。

表4 訪問前・後における全児童対象・学年別の国際理解度得点

項目	全児童 (N=20)		5年生 (N=10)		6年生 (N=10)	
	前	後	前	後	前	後
1. 多くの外国人と友だちになりたいと思う	2.95(0.22)	2.95(0.22)	2.90(0.32)	3.00(0)	3.00(0)	2.90(0.32)
2. 自分が住んでいるまちに、外国人がたくさん住んでも構わない	2.65(0.49)	2.65(0.49)	2.70(0.48)	2.60(0.52)	2.60(0.52)	2.70(0.48)
3. 貧しい国の人の意見をもっと聞いた方がいいと思う	2.65(0.49)	2.65(0.49)	2.60(0.52)	2.70(0.48)	2.70(0.48)	2.60(0.52)
4. ある民族が他の民族より、劣っていると絶対に考えてはいけないと思う	2.85(0.37)	2.70(0.47)	2.90(0.32)	2.80(0.42)	2.80(0.42)	2.60(0.52)
5. 他の国の料理をいくつか挙げるができる	2.35(0.81)	2.10(0.85)	2.00(0.94)	2.10(0.99)	2.70(0.48)	2.10(0.74)
6. 外国の生活習慣をよく知っている	1.60(0.68)	1.80(0.70)	1.50(0.71)	1.80(0.79)	1.70(0.67)	1.80(0.63)
7. 外国のことを紹介する番組を見たいと思う	2.65(0.49)	2.45(0.60)	2.70(0.48)	2.60(0.70)	2.60(0.52)	2.30(0.48)
8. 外国の歴史についての本を読みたい	2.40(0.68)	2.35(0.59)	2.30(0.82)	2.50(0.71)	2.50(0.53)	2.20(0.42)
9. 他の国に見られる独自の習慣を尊重したい	2.75(0.44)	2.45(0.60)	2.80(0.42)	2.60(0.52)	2.70(0.48)	2.30(0.67)
10. 他の国の文化をもっと理解したい	2.60(0.50)	2.60(0.50)	2.60(0.52)	2.70(0.48)	2.60(0.52)	2.50(0.53)
11. 人間が捨てたものは、土・水・空気を汚しているか知りたい	2.60(0.60)	2.30(0.47)	2.70(0.67)	2.60(0.52)	2.50(0.53)	2.00(0)
12. 地球温暖化を防ぐために二酸化炭素を減らす努力をしたい	2.55(0.51)	2.55(0.51)	2.60(0.52)	2.70(0.48)	2.50(0.53)	2.40(0.52)
13. 世界の平和のために働いている人たちを応援したい	2.80(0.41)	2.75(0.44)	2.90(0.32)	2.70(0.48)	2.70(0.48)	2.80(0.42)
14. 貧しい国の子どもたちが教育を受けられるように応援したい	2.85(0.37)	2.65(0.49)	2.90(0.32)	2.70(0.48)	2.80(0.42)	2.60(0.52)
15. 日常会話ならば、英語などの外国語で話すことができる	1.85(0.81)	1.95(0.76)	1.80(0.92)	1.90(0.88)	1.90(0.74)	2.00(0.67)
16. 英語などの外国語で話しかけられても、何を言われたのか理解できる	1.85(0.81)	1.85(0.49)	2.00(0.94)	1.80(0.63)	1.70(0.67)	1.90(0.32)
17. 今後、様々な国の言語を学びたいと思う	2.50(0.76)	2.45(0.69)	2.40(0.84)	2.30(0.82)	2.60(0.70)	2.60(0.52)
18. 英語などの外国語で、いろいろなことを話してみたい	2.85(0.37)	2.80(0.52)	2.80(0.42)	2.80(0.63)	2.90(0.32)	2.80(0.42)

有意傾向が得られ ($F(1,18)=3.316, p<.10$), 下位検定より, 訪問前において5年生より6年生の方が得点が高く ($p<.10$), 6年生において訪問前後で得点が低下した ($p<.05$)。項目9 “他の国の独自の習慣を尊重したい” においては時期の主効果の有意傾向が得られ ($F(1,18)=4.050, p<.10$), 訪問前後で得点が低下した。項目11 “人間が捨てたものは土・水・空気を汚しているか知りたい” においては学年の有意な主効果 ($F(1,18)=6.698, p<.05$) が得られ, 6年生より5年生の方が得点が高かった。また, 時期の主効果の有意傾向が得られ ($F(1,18)=3.447, p<.10$), 訪問前後で得点が低下した。項目14 “貧しい国の子どもたちが教育を受けられるように応援したい” においては時期の主効果が得られ, 訪問前後で有意に得点が低下した ($F(1,18)=4.500, p<.05$)。

このように, 殆どの項目において有意な変化はなかった。但し, 訪問前の得点がすでにかなり高い項目もあり, それらにおいては国際理解の更なる向上があったとしても, 天井効果のため, 得点には反映されなかった可能性がある。訪問前得点が高かったのは, 事前学習の効果もあるだろう。一方, 他国文化への理解や, 国際的な課題・協力に関する項目では, 訪問後の国際理解度の低下が示された。また, 項目によっては, 6年生よりも5年生の方が国際理解度が高いことも示された。

4.2.6 自由記述の分析

訪問後調査における自由記述について, 記述数が多かった項目の例を表5に示した。筆者の1人と協力者1人が, 協議によって内容のカテゴリー化を行った。パディあるいは外国人との交流や実際に訪問経験をしたことによる “親しくなった”, “関心をもった” などのカテゴリーが得られた。

記述の内容と数から, 概ね次のようなことが読み取れた。

①他国民に対する理解や感情に関しては, パディやパディ以外の人たちとの交流によって, 他国の人も親しくなった, 他国の人も楽しい人たちだったという実感を得て, 親しみや好意, 関心をもったように思われる。

②美術館や博物館の見学などでの多様性に触れる活動が, 異文化の尊重や異文化への興味関心の高まりに効果があった。

③教育の平等や人類の課題, 国際的協力については, 関心をもつ児童も若干いるが, 全体として記述が少なく, 訪問が影響をもったとは言えないだろう。

④ “英語などでいろいろなことを話してみたい (項目18)” に関連することとして, 英語がうまく話せなかった, うまく通じなかったという記述が多かった。こうした経験が, 今後の語学への意欲や関心に繋がるものと思われる。

4.2.7 日記の分析

「3.2.2 活動の様子」にも記載の通り, 児童は訪問期間中, 「訪問活動のしおり」に日記をつけていた。そこには主に, どこへ行き, 何を食べたか, パディとどのような活動をして楽しかったか, 動物園でコアラやカンガルーに触ってどうだったか, といったことが書かれていた。それらの中から, 異文化体験についての記述をいくつか抜粋した。

1日目 私は初めて海外に行きました。飛行機も乗るのが初めてです。初めてが多くて不安がいっぱいでした。でもオーストラリアに着いたらなんだか不安が解消されていきました。

4日目 シドニー空港は荷物検査が厳しいとテレビでやっていて楽しみで, 保安検査の時に引っかかっている荷物があってちょっと興奮しました。(S児5年生)

1日目 僕は初めてオーストラリアの地に着いて, 少しの緊張もありましたが, すごくワクワクしました。(略) ド

表5 自由記述例

質問1	記述数16	カテゴリ名
質問1	・言葉がわからなくてもがんばって伝えてくれたから	パディと親しくなったから
	・言葉は違うけど心が通じ合えたから	
質問1	・英語も覚えられていいから自分に得るものがある	自分に得るものがあるから
	・友だちになると, いろいろな国を学べるから	
質問1	・仲良くなっているんな人と出会いたいから	自分の今後への期待から
	・自分のコミュニケーションの自信になりそうだから	
質問2	記述数9	
質問2	・オーストラリアでも外国人といて楽しかった	楽しかった経験から
	・外国人の人といっぱい友だちになれると分かったから	
質問2	・外国人がいるとおもしろそうだから	今後の関係への期待から
	・いろんな人と仲良くできたらいいから	
質問7	記述数8	
質問7	・オーストラリアに行ってもっと外国のことを知りたくなった	訪問して関心をもったから
	・パディに文化について聞き, 興味をもった	
質問18	記述数9	
質問18	・日本語では伝わらないと分かったから	英語で話せなかった経験から
	・外国人と普通に会話できるようにしたい	

ルで初めての買い物をしました。僕は家族のためのお土産を買いました。

2日目 (ウェストミンスター校の授業の) 体育ではサッカーをしました。1対1または2対2でした。日本と共通のルールだったので、すごく楽しくできました。(略) 放課後はドッジボールをしました。日本とオーストラリアのドッジボールは全くルールが違うのがわかってよかったです。僕は英語がしゃべれないが、ジェスチャーで言葉の意味を伝えることができるということを知れて良かったです。

4日目 (お土産屋さんで) 気になったのはピンクソルトという塩です。天然でできているそうです。僕はピンクの塩なんて珍しいなと思いました。(略) オペラハウスは独特な形ですが、それを作るためにはいろいろな努力がありました。それを知って、独特な形を作るのに苦労したんだなと思いました。(Y児5年生)

3日目 (移動の) バスの中で、オーストラリアの人のあだ名を考えました。○○のあだ名がカンガルーで、△△はコアラで、××が錦織圭です。面白いあだ名だから喜んでくれました。すごくうれしかったです。(R児5年生)

3日目 今日は昨日よりバディとたくさん話せて楽しかったです。私は英語がわからなくて困った時もあったけど、わかりやすくジェスチャーしてくれてうれしかったです。(A児5年生)

4日目 今回オーストラリア、特にウェストミンスター校では多くのことを学びました。髪の色や話す言葉は違うけれど、バディたちは同じ6年生だということは忘れないでいたいと思います。(M児6年生)

このように、複数の児童によって書かれているのは、異文化に接するときの不安と緊張、それを乗り越えるための努力、他国と日本の相違点と、他国民と自分達の類似点であった。オーストラリア訪問交流に対して高い意識をもつ児童において、実際に海外に行くという形での異文化経験が、有意義であったことが伺われた。その一方で、楽しかったこと、おいしかったことが述べられ、今回の訪問が観光として満喫されたことが伺われる日記も多くあった。

4.2.8 考察

アンケート調査の結果から、以下の点が示唆された。

まず、児童の国際理解の因子構造が中学・高校・大学生とは異なることが示された。また、アンケートによって測定された国際理解度は、訪問前後を通じて総じて高かった。自由記述及び日記分析からも、児童の他国民に対する親しみ、他国への関心、多様性への理解、語学への意欲向上において、訪問交流が有意義であったことが示された。

一般に、小学生対象の国際理解教育は、教室での授業で、海外に関する教材を用いたり、日本に居住する外国人との交流やシミュレーションゲームを実施したりすることによって行われることが多いと思われる。林原(2009)は、授業で貧富の格差の模擬体験や貿易ゲームを用い、児童に世界経済の問題点への気づきを促し、また世界の様々な食べ方を知ることで異文化への関心・尊重を促している。熊・佐々木(2002)では、インターネットやデジカメなどの用語について日本語と中国語における表記の違いを教え、国際理解度の向上を検討している。これらと比較して、本校の訪問交流は児童に海外を実体験させ、同世代の子どもと直接交流するものであり、国際理解教育として格段に充実したものと言えるだろう。

しかしながら、いくつかの課題も挙げられる。ひとつに、国際理解尺度に関する分析では、有意な量的変化は見出されなかった。他国への関心や外国語への関心において、自由記述でそれらを述べた児童がいた一方で、児童全体としては、必ずしも全員が訪問後にも高い関心を維持し肯定的変化を回答した訳ではないということである。また、分析によって得られた有意差は、訪問後の国際理解度の低下を示すものであった。訪問前には緊張もあり、関心や意欲の高まりがあったと思われる。しかし訪問後は、コミュニケーションができた経験やバディと友達になれて楽しかった経験などは児童の中に残ったものの、その他の海外に対する意識は、アンケート上は不安解消とともに霧散し、得点の低下に繋がったように思われる。日記の記述も、食べ物、動物、買い物に関わる楽しかった経験、驚いた経験が主として書かれており、ともすれば観光旅行日記になっていた可能性もある。

国際理解や異文化体験についての意識化の程度は、児童によって様々であろう。しかし、帰国後の児童の様子を見て、彼らの他者との関わり方の変化を述べた引率教員もいる。全ての参加児童が訪問交流によって何らかの感慨をもったことは間違いない。これらから、児童が直接経験した様々な楽しさ、喜び、驚き、あるいは自信喪失といった実体験を国際理解の深まりに結びつけるために、事後学習の必要性が指摘できる。おそらく、小学生の場合、事前事後の教師の指導が重要である。帰国後、経験してきたことを対象化し、振り返りや意味づけを児童らに促すことによって、多くの児童が訪問交流での経験をより深い学習成果とすることができるのではないだろうか。

無論、何を学習成果とするかは活動の目標次第である。小学生にとっての国際理解とは何か、小学生に求められる国際理解とは何かを発達段階、国際理解教育の目標等を考慮して検討することもまた、訪問交流活動を一層有意義なものにするための課題と言える。

5 おわりに

本論は、本学附属小学校におけるオーストラリア・アデレードに所在するウェストミンスター校への訪問交流活動について、その開始から今日に至る経緯と、2016年の実践について詳述し、その成果と今後の課題について検討した。併せて、参加した児童らの渡豪前後における変化について、国際理解の観点によるアンケート調査および日記の記述分析を行った。その結果、児童に海外を実体験させ、同世代の子どもと直接交流する本実践が、他国民に対する親しみ、他国への関心、多様性への理解、語学への意欲向上において、有意義なものであることが明らかとなった。これらの成果が得られた背景には、事前の学習指導による準備や、実際の交流活動での児童一人ひとりにおける不安を乗り越える努力があった。また、ウェストミンスター校の担当教員や本校の引率教員らの配慮もあって、児童らに体調不良や怪我が発生しなかった、ということも付記しておきたい。

このようなことから、本実践においては、「異国の文化に触れ、外国人と交流することを通して、異文化（言語、生活様式等）への理解と関心を深める」という目的をほぼ達成できたものと思われる。一方、今後の課題として、実務の面では確実な交通手段の準備と確認が必要であること、児童の学びの面では事前準備における学習指導だけでなく、事後まとめにおいて“訪問交流で経験したことの振り返りや意味づけ”を促す指導を充実させることが必要であることが挙げられた。その際、本論で詳述された児童らの学びの機会を活かせるように計画、実践し、それを踏まえて事後の指導に取り組むことが肝要であろう。

註

- 1) 本論執筆者の南雲（当時、附属小学校指導教諭）、周東、越（当時、校長を兼務）は他の引率者らと共に2016年の渡豪を引率し、青木は2010年に、北條は2010、2012、2014年に引率した。
- 2) 鈴木他（2000）による国際理解尺度の4領域と9因子は次のように構成されている。すなわち、人権の尊重（他国民・他民族に対する感情／平等意識）、他国文化の理解（理解／関心／共感性）、世界連帯意識の育成（人類の共通課題への関心、認識／国際的協力機構への協力的な態度）、外国語の理解（理解／関心）である。本論では、これらを児童向けに翻案し、使用した。

引用文献

- 林原 慎（2009）小学校高学年における参加型学習を取り入れた国際理解教育の効果－児童の特性からの検討－，教授学習心理学研究第5巻第2号，pp.61-70.
- 上越教育大学国際交流推進センター（2005）国際交流のひろば第49号.
- 上越教育大学国際交流推進センター（2007）国際交流のひろば第76号.
- 上越教育大学国際交流推進センター（2012）国際交流のひろば第130号.
- 上越教育大学国際交流推進センター（2014）国際交流のひろば第154号.
- 鈴木佳苗・坂元章・森津太子・坂元桂・高比良美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・樫淵めぐみ・木村文香（2000）国際理解測定尺度（IUS2000）の作成および信頼性・妥当性の検討，日本教育工学会論文誌第23巻4号，pp.213-226.
- 熊 安娜・佐々木真理（2002）中国語と日本語を用いた情報用語の学習による児童の国際理解意識の形成，日本教育情報学会年会論文集第18巻，pp.81-84.

A Study of Practice in Australia and an Exchange of Elementary School Activities in Joetsu University of Education: A Partnership with Westminster School

Tamito NAGUMO* · Kazuyoshi SHUTO** · Ryoko KOSHI*** · Hiroaki AOKI**** ·
Reiko HOJO*****

ABSTRACT

An affiliated elementary school has a program in which schoolchildren visit the Westminster School in Australia and participate in activities with local schoolchildren. The purpose of this research was to describe in detail the program's evolution from its founding to the present and to reflect on 2016's outcomes and challenges. A questionnaire survey on international understanding and a descriptive analysis of a diary targeting the participating children were conducted.

Our findings identified the categories "friendship," "interest," and "understanding" as reflecting student views of the actual visit experience. These sentiments were echoed by their teachers as well. A remaining problem for future research is detailed confirmation of demand and intentional support for post-exchange-activity learning as well as preliminary learning.

* Ogata-machi Elementary School of Joetsu City ** Music Fine Arts and Physical Education *** School Education
**** Affiliated Elementary School of Joetsu University of Education ***** Humanities and Social Studies Education